

## 平成19年度 子育て親育て研修大会

- 1 日 時 平成19年9月20日（木）
- 2 会 場 山口県教育会館大ホール（定員500人）
- 3 講 師 北村 弥枝（キタムラミツエ）先生  
・教育研究会未来理事長  
（18年度日本PTA全国大会「家庭教育」分科会講師）
- 4 テーマ ～親が変われば、子どもが変わる～



### 〔講演概要〕

この地よりわが国明治維新の志士やすばらしい吉田松陰を送り出して頂きました。いまこそ日本の国を救って頂きたいと思ひまして、こちらに参りました。

私は、こうして全国講演活動をさせて頂いておりますけれども、それは45歳のときの「気づき」からなのですね。でも10歳のときに、「幸せの海に生きる生き方を知りたいなあ。」と思ったのでした。子どもを育てますときに、10歳というのは小学校4年生ぐらいですけど、このあたりで微妙でもいいですから子どもが思うことというのは、あんがい人生でそのようになるものなのですね。私は、微妙でしたけれども、「幸せの海に生きる生き方を知りたいなあ。」と思ったのです。そのころ、両親も居りましたけれども、幸せそうではなかったですね。特に母は精一杯働くのですけれども、なぜか常に悲しそうな感じでした。だからこういう母親にはなりたくない、ずっと思っておりました。

でも気が付きましたら、45歳は私の母親以上におそろしい母親になっておりました。その45歳の「気づき」といいますのは、息子が大学を卒業して就職した年でございます。年子の娘は大学4年生ですね。それまで、精一杯がんばって参りまして、大阪商人の娘ですから、「人生は金儲け」ということで、たぶん頑張っていた私がございました。だから商売は大好きです。主人の家も商売人でしたから、そちらのほうへ嫁ぎまして、私は店、

主人は御というふうに二人三脚で頑張っただけでまいりました。

そして、息子が卒業しまして、3ヶ月か4ヶ月教育を受け、一枚の紙切れを見せてくれたのですが、そこには1週間先に岡山に単身赴任を命ずと書かれた紙切れでした。それを見ましたときに、ほんとうに衝撃があったんです。あの衝撃が、今の講演活動に繋がるんですけれど、何か知れないけど、明日から生きていけないというぐらいの大きな衝撃だったんです。

それで、「どうしてこんなに大きな衝撃を受けるんだろう。」と思ひまして、分析しなければならなかったんです。「娘がいるでしょう。」と言ってみたんですね。そしたら、心の中に、「娘は嫁にやる子。娘だったらこんなに衝撃は受けない。」って思うんですね。なぜなら、第一念で思ったことなんですね。一番最初に思ったことが、人生のレールを引くことになるんです。だから、「娘さんですよ。お嬢さんですよ。」と産院で看護婦さんが教えてくださいましたとき、わたしの第一念が、「嫁にやる子」と思ったのです。だから、それを基準にしてずっと娘を育てて来ているんですね。ところが、息子は、「男のお子さんですよ。」と聞かされたときに、「一生一緒に住める子。」と思っているんですね。そのあたりで、会社に入って、単身赴任というお話を伺いましたときに、衝撃を受けたことが分かったのです。

でも、それだけじゃないんですね。「主人がいるでしょう。」と言ってみたんです。すると、心の底から、「早くお別れしたい。」って思っているんです。そんな思いを持っているなんて思いもしなかった。だから、私もびっくりしまして、「えー、主人を嫌がってる。」って思いました。でも、仕事が忙しすぎてそんなことをゆっくり考えているゆとりがなかったんですね。でも、魂って知っているんですね。そのように魂が答えるんです。

「私は主人のことが嫌いなんだ。早く別れたいと思ってる。娘は卒業して2、3年働いたら、お別れする気が出来ている。息子は、一生一緒に住めると思っていたんやなあ。この衝撃なんだ。」と分かりました。

それでも、息子が行ってしまうのは、仕方がないですから、「でもどうして生きていけばいいんだろう。」って思いました。そのときから、「心」に気が行きだしたんですね。たったそれだけのことで、明日から生きていけないほど苦しみます。「いったい「心」って何なんだろう。」と思ひ出したんですね。それで、そのときに45歳ですから、15年先の60歳のときにはどうなるのかなと、青写真引いてみたんです。人生の中で青写真は絶対大事ですよ。しっかりと青写真をひいて、こういう幸せな生活に入りたいと思ひて今

を生きていけば、絶対そうなりますからね。これが目的です。私は、無目的で 45 歳までがむしゃらに生きてきたんですね。それで、「60 歳になったらどうなるかなあ。」と思ってじっと考えてみたんです。「息子は就職して岡山に行く。15 年先、ぜったいどこかで恋愛して結婚するであろう。そして、今の会社で 15 年間働きとおす。」と思ったときに、母ですから、なんとなしに不安がよぎるんです。それで、この不安は何って分析したら、「あの会社を絶対に一年以内に辞めるなあ。」って思ったんです。何故ならば、息子の気性を一番よく知っていますから。今よく「頭が切れる」っていいですよ。昔は「頭が切れる」っていうのは、「賢い」ということだったんです。今は違うんですよ。「頭が切れる」っていうのは、「すぐに怒る」っていうことなんです。悪気もなくちょっと無理を言うと、カーッと怒って怒鳴り散らして、もうどうしようもなくなるんです。だから、どうしてすぐに頭にカチンカチンきているのかなって思って、それが私には本当に不思議だったんです。でも、そのような気性で企業に入って、いつも可愛がっては頂けませんので、「ちょっと無理難題のことを言われたり、叱られると、あの息子はたちどころにカチンと頭にきて、怒って辞めてくるだろうなあ。一年持つかなあ。」って思いました。辞めて帰ってきてくれるのは嬉しいんですが、また就職しますよね。だが、前の心のままでは、絶対にまた辞める。「15 年先、あの子は定職に就いていないだろうなあ。」と思う。そうすると今より恐ろしい。

「娘は、嫁に行っちゃうだろうなあ。だけど、娘は大丈夫。自分の意見は絶対に通すあのエネルギーはすごい。そして、どれだけたくさんの方がいらっしやっても物怖じしない。あの子はどこに行っても大丈夫。世の中に出て行ってもどこに行っても成功するだろう。でも 15 年先、どこかへ結婚して行って、子どもが二人ぐらいいるのが 15 年先だろうなあ。」って思う。そして、娘の 15 年先の幸せをイメージしてみたんです。そのときに、はっと気が付いたんです。「は一、もう無理。離婚。」なぜなら、私が、「ちょっとそこ、こうしたら。」って言ったら、10 口くらい返してくる。そして、反省は絶対しない。自分が一番正しいと思い込むタイプ。「ああいう性格で、もし結婚しても、いつも旦那さんが聞いてくれたらうまくいくけれども、旦那さんが怒るかしたら娘はきっと離婚して帰ってくるだろうなあ。」って思った。そうすると、15 年先は、働けない息子と孫を連れて帰った娘、顔も見たくない夫と一緒にだと思えば、息子が旅立つことよりももっと悲惨というのに気が付いた。だが、どう考えてもそれしかでないんです。

「なぜ、そう何だろう。私は精一杯がんばってきた。夜寝るのも惜しんで働いてきた。

それなのに、なぜそう何だろう。」なぜだろうかと分析したら、それはやはり「心」なんです。息子の「心」、娘の「心」、主人を嫌がる私の「心」なんです。みんな「心」なんだなあって思ったんです。そうすると「心に何か原因があるのではないかな。何なんだろう。あの息子の「心」、なぜあんな心が育ったんだろう。あの娘の「心」、なぜあんな心が育ったんだろう。」と思い出したんです。そして、何とかしなければならない。私は必死になって育ててきて、これ以上手の尽くしようがない。じゃあ、どうすればいいの。誰も知らないんですね、そのような答えは。私は、理想とする男の子と女の子の心を育てている女性と私の心を調べてみれば分かるんじゃないかと思い探しました。だけど、いないんですね。みんな私と同じような子どもの心を育てた人ばかりでした。

だけど、一人だけ京都のご婦人が、異色と思われるような方が、ちゃんと育ててはったんです。それで、「あの人だ。」と思って、京都のご婦人にお話を伺いに行きました。お話しをしているうちに、「うちの主人がね」と言われる。もちろんその主人の話なんです。が、「主人がね」と言われたとたん、私の心がグッと痛くなる。そのときは、分からなかったのですが、私は自分の主人のことを思っているらしい。そこで、お互いに主人の話は止めようと言ったんですが、不思議そうな顔をして「あ～、そおう。」と言われる。また、世間話をしましたけど、そのうちまた「主人がねえ～」と言われる。私の心がまたグッと苦しくなる。そのうち、「私ねえ、主人の喜ぶ顔を見るのが一番幸せなの。」と言われた。私は、主人の幸せな顔なんて考えたこともない。顔をちゃんと見た覚えがない。だから、「へえ～」と思ひまして、「主人の喜ぶ顔を見て喜ぶご婦人がいる。世の中って不思議な人がいるもんだなあ。」って思いました。それからの話を興味深く聞かせて頂いたのですが、「実はこの前、旅行に行ってお土産を買ってきたんです。それをあげようと思ったら、たまたま主人が仕事から帰ってきて家にいらはらしたんで、『私が買って来たんよ。』という、私にお礼が来るでしょう。だから、『主人があんたに買って来てあげなさい。』と言って買って来たものなのですよ。どうぞ貰ってください。」って差し上げられたらしいんです。お礼はぜったいご主人へいきますね。「ご主人さん、ありがとうございます。」って言われたそうです。ご主人さんは、嬉しそうな顔をして、「いえいえ、貰っていただきます。」と言うその顔が嬉しい。私は、それを聞きまして、「えらい違うなあ。主人が買って来たものでも、私が買って来たと言うだろうなあ。」って思ったんです。

それですぐ分かりまして、ここが違うと気が付いたのです。「主人に対する思いが違う。

ひょっとしたら、このあたりが、この子どもの心とうちの子どもの心が違うんかも知れんな。じゃあこの辺を修正してみよう。」と思ったんです。

それで、大阪に帰る電車の中で、「私、無関心な連れだったんだらうか。」と思って、今現在からずーと思い返して、すぐ分かりました。私一度も好きでなかったんです。そのとき、すぐわかったとき、びっくりしました。よく尊敬もしないで、好きでもない人の子どもを二人もよく産んだなと思ってですね。でも、それには理由があるんです。私こうしてね、皆さんの前で喋らせてもらっていますけれど、実は私、赤面症でして、どもりだったんです。だから、特に殿方に対してなったのです。だから、私、本当に、一応大学は出さして頂きましたけれども、女子校だったので、中学からずーと女子校でしたので、殿方にあまり会っていないのです。そして、卒業するときに、父が「卒業したら結婚やで。」って言われたんです。まだ明治生まれの、ものすごく厳しいのです。絶対に「はい、分かりました。」と言わんと、いっぺんに怒られますからね。嫌も特に言われませんね。「はい、分かりました。」と言って、そのときに「もう見合いなんて大変やな。いややなあ。」って思いました。そこで、いちばん最初の人のところへお嫁に行こうと思いました。それが主人なのです。それで、12月の30日ぐらいに、私のお花の先生の紹介で、主人に会わせて頂きまして、「さあどや。」って言われて、一回目の見合いで結婚しようと思っているから、「結構でございます。」って言って、5月1日のメーデーの日に結婚式だったんです。なんでメーデーなのか分かりませんが、そういうことで決めまして、その後主人に、1回だけ会いました。それも、話をするのも嫌で、顔を見るのも嫌やから結婚式まで会わないでおこうと思ったのですが、父が叱りまして、「お前、一度も話しもせんとよう嫁に行くな。一緒に会って、話しなさい。」と言われまして、また「はい、分かりました。」と言って、顔も見ず、話もしないところはどこかなと考えたんです。漫才がええなと思うたんです。それで、「漫才がええ。」と言って行きました。顔を見ないで、前を見て笑っていればよろしいから、漫才って楽ですね。

それで5月1日の結婚式に、家を出るときにはっと気が付いた。「私ここを出たら、もう帰って来られへん。やっちはったんや結婚。」と思ったんです。そのとき、「主人の顔を知らん。憶えてへん。」見たことのない人ばっかし、ぎょーさん並んでいて、「どれが私の主人か分からへん。主人の顔をよう憶えておこう。」と思ひまして、「この人かなあ。」って思っ行って、その人だったんです。そして、関東のほうへ二泊三日ぐらいの新婚旅行して帰ってきまして、姑さんがその時いたんです。「よろしくお願い致しま

す。」と頭を下げまして顔を見た。そしたら、姑さんがねえ、両目をバーと吊り上がらしまして、「今日からあんたをいじめる。」と言われたのですが、冗談だと思った。

でも、顔が真顔ですから、「これはほんまかな。嫁姑って仲が悪いっていうけど、こういう風に宣戦布告して、仲悪くするものかなあ。」と思うんですけど、そんなことないですよ。でもその姑さんはそれから、本当にいじめて下さいました。それで、一年目に放り出して頂きました。それも、一銭も貰わんと放り出されました。その後、息子が生まれて、そこから主人との人生が始まりました。だから、私はそのときから、乳飲み子を抱えまして、生きていかなければならないと思って、それから悪戦苦闘して店を開きまして、45歳まで一生懸命に主人と共にはたらいで来たのです。

だけど、その心が、「頼りない人やなあ、この人は。お母さんの理由は分らんが、お小遣いを一銭も貰えん、はら立つなあこの人は。」だから、最初から本当に私の心の中に入っていないです。私は45歳まで、「自分が頑張らなあかん。」と思って、頑張って生きてきたんです。

帰る電車の中で、そのお友達のすてきな子どもを育てている奥さんからみて、今のようなことを思い出しました。そして、大阪の家に着いたときに、「なんと悲しい生き方をしていたんだろうなあ、私は。」と思った。「でも、そういう中で子どもが育ってたんだなあ。二人の子どももかわいそうなめに合わしてたんだなあ。」って思ったんですよ。でも、がむしゃらに生きて来ましたから、いい親やと思うてましたから、そんな可哀相な目に合わせていると思ってなかったのです。そんなに主人とも喧嘩しません。喧嘩する時間が無いのですよ、忙しすぎました。「でも、これはあかん。主人を尊敬せなあかん。どうにかしなあかん。主人のすることを嬉しいと思う心にならなあかん。」と思いまして、「そうでなかったら、主人も可哀想すぎる。」と思ったのです。「こういう厳しい心では、私も可哀想。」と思ったのですね。

そしたら、京都のご婦人のように、ああいう心になれば、幸せになれると思いまして、「じゃあ、何の機会から始めようか。」と思ったのです。今の今まで馬鹿にして、今の今まで排斥する人を、急に好きになって、その人のために生きることが嬉しいなんて、そんな心なんてなれないですよ。だから、徐々にしていかなければいけないと思いまして、何からと思ったときに、子どもが悪いことをしたときに、一番に「謝りなさい。」って言っていました。だから、「まず主人に頭を下げて、謝ろう。」って思ったのです。

表から主人が帰って来て、ドアを開けたとき、「おかえりなさい。」って言いました。

そしたら、主人が私の顔を見まして、「ばあちゃん、倒れたんかああ。」って言ったのです。なんでドアを開けて、「おかえりなさい。」って言って、お母さんが倒れたことになるのか分かりませんが、親のことだから、「いいえ、倒れておられません。」と言ったら、不思議そうに私の顔をじっと見て、「じゃあ、岡山にいる息子が交通事故でも起こしたんか。」って言ったのですね。そのときにもう分かりました。結婚してから一度も「おかえりなさい。」ってドアを開けたこともない。私は、鬱陶しい人が帰って来たと思って、背中を向けて、チリメンジャコを頬張りながら、主人に背中を向けて、主人を追い遣っていました。「なるほど、そういう生き方をしていたんやなあ、これだけでも謝らなければならないなあ。」と思ひまして、主人に、「すみませんが、部屋へ上がって頂けませんか。」と言いました。

主人は嬉しそうな顔をして「だいじょうぶか。」と言われて、座って頂いたのです。すると、一番部屋の入り口に座って居られるのです。頭を下げる私が、ちょっとう、跨いで奥へ行けません。「お前がいつもここへ座れと言っていたやないか。」それまで、全然そんな恐ろしいことに気づきませんでした。「なるほどなあ、軽蔑して馬鹿にしていたら、こんなことを平気でしていたんだなあ。何かしなければならないなあ。」と本気で思いました。それで、奥に行って頂いて、座って頂きました。

心って不思議ですねえ。まだここまで嫌いなのです。頭を下げようと思っても膝が伸びて下がらないのです。私の苦しかった場面が、走馬灯のごとく浮かんで来るのです。そのときに、怒りが出てきて、悲しみが出てきて、謝るところではないのです。これで言葉を出したら、厭味を言うと思う。それで、主人の顔をフッと見たら、主人は怖がった顔をしてらっしゃる。さあ、覚悟を決めて謝らなければと思って、謝ろうとするが謝れない。でも、座って頂いたのですから、これではどうすることもできませんので、「お茶をお入れします。」と言って、お茶を入れに行ったのです。

このときに一つだけ気付きました。「心って不思議。自分で謝ろうと思ひながら、謝ることができない。今までの人生で、謝ることができない心が作られているんやああ。」って思ったのです。

この国は、「勉強することがいいことだ。正しいことをすることがいいことだ。」と誰でも知っている。でも、できない。「できない心を育ててしまっているんだなあ。」って気が付いたのです。「子育てっていうのは、素晴らしい心、勉強大好きな、ひとに優しくすることが大好き。そういう心を育てるのが、子育てなんだなあ。なるほど、わたしはこ

れまで間違った心を育てたんやなあ。人の痛みが分からない心、息子のああいう心、娘のああいう心になるんや。」と思ったのです。

それで、お茶を入れながら、「よし、らしいまともな心になろう。」と思うたんです。主人を一とする心です。「まともな心をまず作ろう。妻として主人を尊敬し、主人を愛する心を作ってみよう。」と思うたんです。「そうしないと、私のこれからの人生は不幸になってしまうだろう。」と思うたんです。しかし、頭を下げるのに失敗しましたから、次ぎに何をしたいか分からない。でも、「まずこれからやろう。まず、頭下げよう。」と  
思ってですね、一週間掛かりました。毎日、お茶を入れに行きました。それで、一週間目に、「もうあかん、顔を見たらあかんようになるから、顔を見んまま頭下げたままで、お礼言うて、感謝をして、終わりにしよう。」と  
思って、そうしました。それで、頭下げたのですね。不思議でしたね。心の奥底にあったものが、フッと取れたのです。「や一、まだ本心から下げてないし、本心から謝ってないのに、ごめんなさいという言葉を通して、私の心の中心のひきつけが和らいでいるう。」って気が付いたのです。そうすると、「主人を心から尊敬して愛したならば、胸一杯に安らぐんやああ。」と思ったのです。「これは、する価値あるな。」と思うたのです。それから次に何をしようかと思ったら、「聞いてみる」ということです。主人の言われることを心から聞いて、素直に「はい、よろこんで。」と聞いてみようと思ったのです。しかし、主人に何か言って貰おうと思っても、言ってくれないのです。それは何故かという、分からないでもない。「あれ、主人ってこんなに自分のことを自分でしてらしたのかな。何で私に用事を言ってくれないんだろうな。不思議だなあ。自分のことを全部してはるなあ。」と思うたんです。「私に言われたことを全部しようと思っているのに、これじゃあ困るなあ。」と  
思って、じいーと考えていたのです。すると、主人が「はい、お茶。」と  
いって持ってきてくれたんです。ズーとこう飲みながら、「アレッ、主人が入れてくれはったんかいな。」って思うたんです。「アレッ、これって変。」って思うたのです。でも、きのうまでは変と  
思っていないのです。当たり前と思っていたものが、「アレッ、これって変。」って思うたんです。そのとき、  
「ハアアー主人は、いつもこうして私を見て、私が喜ぶようしてくれてたんだなあ。私がしんどい目にあっていると思うたんやなあ。申し訳ないなあ。」って  
思った。主人の方を見ながら、「お父さん、ごめんなさいね。いつもこうしてお茶を入れてくれていたのに、私気が付きませんでしたね。飲んでいましたけど、主人に入れて頂いて感謝も何もせず、頂いていましたね。あなた、ごめんなさいね。」って、初めて言うたんです。そして、主

人が待っていましたので、主人に言うたんですけど、そのときになって「お父さん、何でも言うてください。一応、私、妻ですから。私がお茶を入れる立場なのですから。お父さん、これからは入れないで、言うてくださいね。」って言うたんです。「今度からは言う。」って言うてくれました。

それから、「配達に行くから、商品入れといてくれんか。」とお願いしました。それからちょいちょい言うてくれますので、主人の言うことを一番にしたのです。半月ほどして、「君は馬鹿な女じゃなかったんだね。」と言われました。何ともこの言葉は衝撃でした。まだ、半月ですから、私の心は主人を馬鹿にしている段階ですからね。その馬鹿にしている人から、「君は馬鹿じゃなかったんだね。」と言われた衝撃です。「えっ！」と思って、お父さんが言った「君は、物忘れがひどい女だったんだよ。今は忘れないでやってくれる。実際、物忘れのひどい女じゃなかったと最近思うようになったんだよ。」と言われた。そのとき、「この賢い私がなぜ忘れるの。」と思って、ちょっと分析してみたんです。分かりました。「馬鹿にしている人の言葉は、頭の上をサーと通り越して、心に入らないんだ。そのうちに、馬鹿にしているから、何とも思っていないから、自分のしたいことを先にして、そのうち本当に忘れてしまう。主人がしてくれたかって言っても、馬鹿にしているから、「あ、忘れていた、御免。」と言って、反省もしない、何も心に引っ掛からないから、なるほど、そして忘れ続けて、主人に馬鹿な女だと思われていたんだと思う。なるほどなあ。」と思いました。心ってそういう風に動く。

私は、実は数学が大好きだったのです。特に、難しい問題をジーと考えるのが好きなタイプでした。ところが、ある日突然に、数学の成績がガターンと下がったことがあって、それは自分自身も、何故こんなに数学ができなくなったのだろうって不思議だったのです。でも、そのときに初めて分かったのです。今まで、数学が好きだったのは、数学の先生が尊敬する先生だったのですね。だから、数学が大好きで、ずっと勉強していたのだけど、その先生がご病気になられたので、大学の先生に変わったのです。その先生を見た瞬間に、頼りなさそうって思ったのです。だからその先生の言うことが、まるで心に残っていないから、それで成績が落ちたと、分かったのです。「そうか、子どもにはどの先生も尊敬するようにしておかないと、その教科ができんようになるな。」って思ったのです。「なるほどなあ。」と思いましたね。

だから、「子どもにはどの方に対しても尊敬できるようにさせていかないといけないのだなあ。私が主人を尊ぶことなのだなあ。」って分かってきたのです。

四十五歳。そして、主人の言うことを喜んで喜んでと言っているうちに、「喜んでするのは誰にでもできます。もっと賢い妻はどう思えばいいんだろう。」と思ったときに、気が付いたのです。「主人のなさることは、全て成功するのである。」と思ったら、そうなのですね。「よし、活かせる。」と思って、それから一日に一度集中して、子どもたちと生活しているときに、「主人のなさることは、全て成功するのである。」「主人のなさることは、全て成功するのである。」・・・

主人のイメージを頭に描いて、ジーと主人を取り込んできて、頭に描いてみたんです。悲しいことに最初は、主人がイメージできませんでした。真っ暗で何も浮かばない。それから、やがて、やる度に出て来ないのが、やがてずっとし続けているうちに、半分くらい出て来だして、やがて明らかに出て来るようになった。ピカーと出て来るようになったのです。「やっと、主人が成功しているイメージが出るようになったのかも知れない。今までは、イメージ出来てなかったのかも知れないな。」と思いました。それから、そのように一生懸命にイメージしていました。そしたら、本当にくっきりと主人の顔が浮かぶようになってきたのです。そのあたりから、主人のなさることが成功してきたのです。

そして、それをずっとし続けるとどうなるかという、主人が上昇しだすのです。日に日に上昇しだすのです。上へ昇っていかれるのです。上の方でピカーと光っているのです。「へえー、こないなるのか。」と思いました。そして、不思議ですけど、ある日、そこで綺麗に光っている主人の横に、もうひとつ光が見えたのです。「えー、もうひとつ光がある。これ、何なん。これは何なのだろう。」と思っているうちに、ジーと見ていたのですが、どうやら息子らしい。「エー、息子がここにいる。」私、息子のことは何も思うてないのです。「何で息子がここにいるの。」って思うたんです。そのときに、大体感じたのですが、「主人を尊敬しているだけで、息子が世の中で尊敬されるような上昇気流に乗るのだな。息子の行動がそのようになる。これは、怖いなあ。」と思うたのです。これは、すごく怖いことです。「主人を馬鹿にすれば馬鹿にするほど、災いの気持ちが息子に行って、すぐにカーと頭にくる心、皆さんから近づかん方がいいと思われ、人生を悪くしているのかも知れんなあ。」って思うたのです。そしてそういう息子がこう出てきたのですね。そのときに、「なんか、妻の心が出来てきた。どういうことかと言うと、もっと尊敬して愛する心ができるようになった。」と思うたのです。

そうしたら、一週間目に息子から電話が掛かってきて、「お母さん、ぼく心が出来てきましたよ。尊敬、素直、報恩、感謝。これら、みんな知らなかったんです。こういう心が

あったのですね。ぼく、知らなかったのですよ。ぼく、そのような心、今まで知りませんでした。」と言ってきたのです。それを聞きながら、「そんな心を知らないってどういうことなのだろう。」と思いながら、ジーと聞いていたんです。「その心を、ぼく会得しました。お母さん、ぼくの呪われた人生は終わったのです。これからは幸せの人生を歩んで行こうと思います。お母さん、ありがとうございます。」と言ったのです。「へえー、そんな心になってたんや。」思わず何でそうなったのかと息子に尋ねたのです。「素直って心は、素直って百万遍言っても会得できない。そうだろう、お母さん。」って言うのです。「じゃあ、どうしたら・・・。」と言うと、「自然と中から湧いて来たんだよ。」って言うのです。そして、「湧いてきた」というのを聞かせて貰おうと「ちょっとお母さんに聞かせて。」と言うたんです。そしたら、「この一年間、ぼくは辛かったなあ。今日辞めよう、今日辞めよう、今日辞めよう」って、今日、会社に行ったら、上司がこれでもかといわんばかりに、ぼくを罵倒した。「もう、ここには居られん。」って思ったけれど、出社してすぐ辞めるわけにもいかん、帰るわけにもいかんから、「よし今日一日だけ仕事しよう。」何か一番遠くの客のどこへ行って、それから帰って、もう辞めるという辞令を書いて明日渡すのだと、高速を走りながら、その上司の嫌な言葉を思い出しながら、ずっと怒りのエネルギーを心から溢れんばかりに溜めていたと言うのです。そしたら、向こうの方で、一番中心の方で、ぽっと何かしら和らいできた。「何だ！これは」と思ったのですが、それが胸いっぱい広がってきて、「止めてくれ。この光を受けるわけにはいかん。明日、辞表を叩きつけるんだから。」と思っているのに、ワーと広がってきたら、その怒りが全部消えた。「なんやこれは。」生まれて初めての体験が起きて、これは何だと思っていると、涙がスルスルスルと出てきて、「悲しくもないのに、怒りもないし、嬉しくもないのに、いったいこの涙は、何なのだろう。」って思ったのです。すると心の奥底から、「上司は尊敬すべき方なのだよ。尊敬しなければならない立場なのだよ。」という思いが湧いてきた。その光が入って来た途端、不思議な思いが胸一杯に広がって来たと言うのです。それで、息子はその世にも不思議な心の広がりに対して、「これは尊敬の心かも知れないな。尊敬という心があったんだなあ。」と思って、そして先の上司の言葉を思い出したのです。ほんのさっきまで、その言葉を思い出したら、怒りがグーと来ていたのに、この尊敬という言葉を出したら、怒りではなく、反対に、上司の心が手にとって読める。」と言うのです。そのときの上司がどういう思いで言っているのかが、手に取るように読めると言うんです。そのときに初めて、息子は尊敬の心があるって分かったのです。

だって、今頃、上司の心が読めている。しかも自分の心がこんなに変わっている。へえーと思ったのです。この下から不思議な心が湧いてきたのです。何ともいえない、上司に「謝りたい、謝りたい、誤りたい。」と謝る心が、「よくお母ちゃんが謝れと言っていたけど、そんなことできへんかったけど、この心やったら謝れるなあ。」と思ったら、知らん間に、「ごめんなさい。」と言っていたんですね。そしたら、また、不思議な心が湧いてきたんです。「ごめんなさい。」と言ったら、上司に対して「何かをしたい、申し訳ないから、何かをしたい。これが報恩か、これが感謝か。」と思ったときに、「こんな尊い心があったんやなあ。これを会得したら、ぼくはこれから、怒ることもないし、悲しむこともないし、嬉しい人生に入るのだろうなあ。」と思ったときにお母ちゃんに電話して、今話をしていると言いました。だから、それを聞きながら、じゃあ、この心をいつ教えるんだ。私が息子を産んだのですから、「母はいつ教えるの。」って、自分の心に聞いてみたのです。そうしたら心の中から、「胎教」って言ってきたんです。「胎教で、一旦私が尊敬したら尊敬の心を伝達できる。反省すれば、反省という心を伝達できる。素直に聞いたら素直という心を伝達できる。なるほどなあ。」と思いました。

今日のはなしの中で、姑さんが「いじめませ。」と言うて、いじめて頂いて、おどおどビクビクして、顔も見たくないと思いながら、自分の家の中で小さくなって、そしてその横で、お母さんと一緒になって私のことをいじめるふがない主人のことを見て、私はあの胎教中に一度も「尊敬」、「素直」に聞く、「喜ぶ」、「感謝」、そんな心になったことがないってことに気が付きました。だから、あの子は、知らなかったんだと分かった。「なんと恐ろしい母親やったんやろうな。いくら環境がどうであっても、それじゃあだめだったんだなあ。申し訳ないことをしたなあ。」と思って、電話を切った後、しゃがんでひれ伏していました。岡山の方をむいて。おろそかな母を許してほしいと思ったのです。

でも、そのときに分かったのです。あの子が幼稚園のとき、半年不登園したのがよく分かったのです。うっとうしい人がいっぱいいる、それは園長先生はじめ諸先生方、それはうっとうしい、声も聞きたくない、顔も見たくない、世にも不思議なことに、おやと思っただけれど、私はそれをしっかりと教えた。姑さんは、私や主人、大切なお方様に対して、「顔も見たくない、声も聞きたくない、ここにも居りたくない。」それを一生懸命に教えたから、あの子は尊敬する立場の人の前に行ったときに、教えられたとおりの心のままにいたから、半年不登園したんや。それでも、私が厳しかったから、泣きながら幼稚園に行ったのやなあ。すぐ分かりました。小学校でどの先生とも馴染まず、中学校に行ったら、

先生を仇呼ばわりして馬鹿にして、高校に行ったら無視して、大学に行ったらもっと無視して、大学を卒業したその年に、「お母さん、僕の呪われた人生は終わった。」と言うたのは、私の胎教のせいと思うたんです。「でも、あの子、そういう心で、よく学校へ行き通してくれたなあ。」って思いましたね。

そのときに気がついたのです。「これは、大変なことだ。主人を尊敬もせず、言うことを聞きもせず、感謝もせず、反発ばかりする心しか教えられていない子どもが、世の中に出てきたら、学校に行ったら先生の言うことを聞かず、左を向けと言ったら右を向き、座れと言ったら立ち動く、そういう子がでるかも知れないなあ。」と思ったのです。

そして、世の中を見渡してみたら、そういうお母さん方がいますよね。「これはえらいことになるなあ。これはたいへんなことになるなあ。」と思ひまして、でも自分の体験が人さまの役に立って、そういう悲しい子どもの人生だけは歩ませたくないと思ひまして、

45歳で気付いて49歳から講演活動を始めたのです。知って頂きたい。愚かな私の体験を知ってもらって、皆さまの役に立ててほしいと思ひて言い続けているのです。でも、今から17、8年前は、知らん間に悲しい心を育てるといふ、そういう事実は無かったのですよ。でも、そういうお話しをしている最中に、「明治時代みたいなことを言わんといい。」と言われたこともあります。講演の最中に、後ろの方で立ち上がって、「今、世の中の女性は、家で子どもを育てるなんてナンセンス。夫婦二人で育てればいいのよ。あんた何言っているのよ。」って言われたのです。でも、「心の法則は、法則としてある。」って言って、「私も働き通しています。でも、「心」が大事なのです。」って言ったのです。そのご婦人はよく理解してくださいました。「じゃあ、私たちはそのような心で生きて参りましょう。」って言って、頑張ってくださいました。だからいい子が育ちました。

そのうちに、果て無い暴力、学級崩壊、そして引きこもり。世の中に出て行っても、尊敬という心を知らなかったら、職場に心を合わすことができません。学校では、先生方に許していただいて、そのまま置いておいて頂けます。対等という立場でおいていただけませんが、世の中では、職場では、対等は絶対に許されませんので、もう絶対に働けないです。だから、胎教で心、素直に聞くという心を教えて頂いてない子ども達が、世の中で素直に聞いて、尊敬するということができないですね。だから、働けないのです。そして、家でも「尊敬する」、「感謝する」、「素直に聞く」ということができませんので、ちょっと無理難題を言われたら、暴れますね。家庭内暴力です。もちろん学校は楽しくないですね。

そして、そういう人が増えてきたら、フリーターやニートという言葉ができましたね。今、ニートやフリーターは、表に出ているだけでも、500万人からいるんです。大変な時代になってしまったのだな。私が気付いたときには、そんな人はいなかった。わが息子でさえ、一応働けたのです。ところが、今は悲惨です。そして、不登校。この14、5年で大変になってしまいました。

そして今、国をあげて大変ですね。一番働き盛りの子ども達が働かないのです。税金を納めないのですよ。だから、普通に高校とか大学を卒業して働いても、ニート・フリーターの子も達が、普通に働いて税金を納めるだけで、20兆円からの税金を納めることができるのです。それを今、収めていないのです。そして、その子ども達の将来を日本の中心になる人たちも憂いていらっしゃいますし、ご両親も悲しんでいらっしゃいますけれども、いちばん評価しているのは、諸外国、特にアメリカ、ヨーロッパの皆様方なのです。貧富の差ワースト2とまで、去年言われました。いちばん貧富の差が大きいのは、アメリカで、その次は日本。去年おとしと言われたとしても、それ程気にしませんから国民には分からないのです。でも、アメリカやヨーロッパは、10年20年先をみて評価しますからね。ニート、フリーターがこれだけ出たとしたら、この国の将来は、どうなるのか。悲しい人生に入るのですよ。この子達は、そうして、貧富の差という風に表現されております。アメリカに次いで2位という風に評価されているんですが、まだ私たち一人一人は、私たちのお祖父さんお婆さん、お父さんお母さんも一生懸命働いて、貯めたお金があるので、そして貯金もある。まだお家もあるということで、ニート、フリーターの子も達の大変さが、まだこれまで分かってないのです。また、国民全体がまだ少し分かってないのです。

けれども諸外国は、それを気づいて、貧富の差ワースト2と言われているんです。だから、今手を打たないと大変な事態になるのです。それでも、国の中心となる人、トップの人たちが気付かれて、何とかしなければならぬと、あらゆる手を打たれていますけれども、的が外れています。簡単なのですよ。私たちの心を変えればいだけなのです。「らしい心」を取り戻せばいだけなのです。「妻らしい心」、「嫁らしい心」、「母らしい心」を取り戻すのは、タダです。仕事をやるなど言っているのではないのです。「ああするな、こうするな。」と言っているのでは無いのです。自分の心を少し努力して、ちょっと良い頑張りを出して、子ども達の心が正常になって、きっとその年に相応しく羽ばたいていくようになるのです。

これがいちばんのやり方です。だから、学校の先生が、ぜんぶ不登校はもう駄目という風に評価してらっしゃるけれど、私の講演を聞いて下さった彼たちが、だいたい半年か一年で、みんな学校へ行っています。不可能じゃないのです。そのかわり、お母さまが夫を一にして、夫の方に向けて頂かなければなりません。私の言ったように、そうして頂くことで、子どもの心が楽になるのですね。お母さま方が子どもの方を向いて、「いけないひと」、「動けないひと」の状態を常に苦しんで、悲しんで、その子のことを直せば直すほど、立ち上がれなくなるか、より悲惨になるのです。だから、それは自分の結果だと思って頂いて、そして、その日の反省をして、主人のほうへ意識を向けて頂いて、旦那さんに喜んで頂くように、少し努力をしていくと、気が付いたらスーと立ち上がる。

実は、ほんの先々週ですけれども、講演をさせて頂いたその日のうちに、講演を聞いて頂いていたご婦人が、「子どもが学校に行きたくないと言うのだけれども、私は主人の方を向いていなかったなあ。」と思われまして、旦那さんも一緒に聞いてくれていたらしんですが、「申し訳なかったなあ。」と思われて、お家に帰られて、すぐ謝ったそうなのです。私は一週間掛かったのですが、その人は本気ですぐ謝って下さったのです。そうすると、いやや言うてたその子どもが急に、「お母さん、あしたから学校へ行くわ。」って言ったそうです。「えっ、私たちが聞いただけで、子どもが学校へ行くって。」そう言うと、お父さんは一言だけ、「がんばれよう。」と言って下さったのです。そして次の日、「行くかな、行くかな。」って思っていたら、いつもでしたら、旦那さんは勝手に起きて、何かしら食べて、行かはっていたらしいのですが、謝ったら力が沸くものですね、朝、さっと起きられたらしいのです。起きられて、朝食をお作りになって、そしてご主人さまに「行ってらっしゃい。」って見送って、そしてお部屋へ帰ったら、子どもが身支度して学校へ行くのを見たという。それを京都の事務所までお電話頂いたのです。「先生は長いこと掛かられましたね。私は、すぐ謝りました。」でも、そういう話を伺うのが嬉しいんです。「あなた、素直だったんですね。私は、素直じゃなかったんですよ。だから素直になれるそのときからすばらしい結果が出るんですよ。あなた、素敵ですね。」って言わしてもらいました。だから、「これから、もっともっと旦那さんのことをうんと兎に角見てくださいね、そして良い知恵を長く語れるように、頑張っていきなさいねえ。」ってお願いしたのです。

その奥様の心次第。でもみなさん、それは素直ですね。だから本当に私のところには、そのような嬉しいお便りをいっぱい頂いております。そして、去年のこういうふうに全国

を講演しておりますと、お母さまお父さま方に、夏休みの間に2泊3日ぐらいの地域の子どもたちをそういう勉強をさせてもらえませんか、という声があがってきまして、それで、北海道、東京、大阪と3箇所に行ってきました。そこで、いちばん何を教えたかという、「感謝」。皆さんにウンと喜んで頂いたのは、「感謝」ができればよくなるんです。だからそこでは一貫して、まずお父さまお母さまに対する感謝を教えます。だいぶ腐れています。「何で連れて来られたんや。」という顔をする子もいますけれど、でもちゃんとお話したら、子どもたちは分かるのですね。その場に、命を掛けて来ている人もいらっしゃいます。そのいらっしゃるところで、こどもたちにまず挨拶して貰います。お父さまお母さま二人、子どもと同じに座って頂いて、そして、「ここまで育てて頂いてありがとうございました。」と真心で頭を下げて頂きます。そしたら大抵、わんわん泣きますね。

「こちらこそ、至らない親でごめん。」親の目を見て、そこで心が安らぐんでしょね。帰ってからもずーと続けているという人います。そうしたら、自然とお母さまに「感謝」が湧くのです。「お母さま、ありがとう。」とか、「お父さん、行ってらっしゃい。」とか、そしたら家の中で心の挨拶ができるようになります。これがすごい心の交流になるのです。子どもにやる気が出てくる。そして、心が通ってくるのです。だから、「感謝」という心が、本当に子どもたちには大事なのです。そして、「ありがとう。」という言葉がいちばん大事なのです。だから、そのあたりはちょっと家庭で、言って頂けるといい。

そして今年、吉田先生のお話を子ども達にさせて頂きました。すばらしいですね。あの方も、とにかくすばらしいですね。ご自分の結婚する相手は、学問をしっかりなさる、特にお勉強の大好きな方と結婚したいといって結婚されたのです。そして、心が本当に細やかなのです。そして、そのように学問の大好きなご主人さまと結婚なさったのですが、少し貧しい方で、だから田地畑を耕かさないといけないのです。そして、お母さまがご病気になって、妹さんが帰って来られて、昔はその蒔きもないですから、だ、一週間に一回、角材か何かを燃やす。結婚してすぐに、お風呂だけは毎日焚かせて下さいという条件で結婚なさったらしいのです。そして、お風呂を毎日焚いて、その病気のお母さまを入れ、妹をみられて、お母さまも元気になってこられたのです。本当に明るくって、みんながお金を使わずに愛を育てるすばらしいお母さまだったのです。だから、あんなにすばらしい方を世の中に送り出すことができたのだなあと思って、私はやはり女の力はすごいなって感じさせて頂きました。その話を聞いた子ども達がまた凄いのですよ。

「すごいなあ。」と思って、「僕たちも、そのように素直な偽りの無い、そして自分の意

見が正しいと思ったらどこまでも通す、そういう心になりたいなあ。」という風に、みんな分かってくれました。それから、お家に帰ってから反省文を送ってくれる子がいるのですが、そしたら「あの先生のようにになりたい。」って子がいるのです。そしたら、こちらの講演に来ることになりましたので、本当に感謝の意を込めまして、こちらで講演をさせて頂くわけでございます。

でもいまこちらの方では、こういう話ができますけど、東京の方では難しいんですよ。こちらは離婚は無いのでしょうか。3年ほど前ですが、東京の方で講演させて頂きました。やはり、中学、高校、小学校のPTA連合で、その地域で呼んで下さったのです。そのときに、控え室にPTAの方々と校長先生がいらっしやいまして、「先生のお話しは夫をとすお話でしょう。」と言われて、「そうです。」と言いました。「でもここはねえ、もう半数以上離婚しているんですよ。」と言われるのです。「三分の一じゃないのですか。」と問い直しますと、「半数なのですよ。」と言われる。「特に、今日来てくれるお母さん達、もっと多いと思いますよ。」と言われました。「だから、そういうお話しをなさっても、夫がいないんですよ。先生、他のところで言っただけませんか。」と言われるのです。「分かりました。でも、この生徒は子どもさんでしょう。」と言うと、「そうです、そうです。」と言われる。「子どもさんでしたら、同じなんですけど・・・。まあ聞いて貰いましょう。」って舞台に立ったのです。

「子どもにとって、お父さんお母さんは絶対なのです。だから、お母さまがこのお父さまをどう思っているかの思い続けるエネルギーが子どもの人生を変えてくるのです。子どもの影響に現れてくるのですね。だから、今日は聞いてくださいね。」と言って、「その子どもにとってのお父さまは、再婚している人はきっとすばらしい方と再婚してらっしゃるでしょう。でも、わたしがこのことに気付いた18年ころ前に、アメリカに行きましたときは、離婚して子どもを連れて再婚して、その次で子どもが原因でまた離婚して、また再婚して、また離婚して、というのが、アメリカの現状だったのですよ。だから、せっかく再婚なさったのだから、またここで離婚しないようにも繋がりますので、しっかり聞いてくださいね。」ってお話したのです。それはどういうことかということ、まずお別れしたそのお父さんの方へ行きまして、今どこか分かりませんが、いらっしやるつもりで、まず謝らなければならないのですよね。「あなた、ごめんなさい。私が至らなかったことに対してごめんなさい。今どこにいらっしやるかも分かりませんが、どうぞお幸せになって下さいませ。」って謝るのです。でも、たいてい離婚された方は、顔がぱっと引きつり

まして、「先生、それだけは許してください。あの人の幸せなんて考えられません。あの人が幸せになるのだったら、私一緒に地獄に落ちる方がましです。」と言われる。「でも、あなたは今、子どものことで来ているんでしょう。それって地獄やないのですか。そこから助かりたいって思っただけで来ているんでしょう。」と言うと、「ああそうです。」「じゃあ、ちょっと聞いてくださいね。」それはどういうことかと言いますと、まず主人の方へ頭を下げますけど、心の中に嫌というか、抵抗と言うか、もう本当に苦しさが詰まっていますね。だから、最初から幸せになって下さいなんて思えませんよ。ムカっときて。でもそれは違うのですね。あなた、幸せになって下さいね。嫌なことでも無理に思いますと、そのうちに、一日目はむかついて、二日目は昨日よりまし、三日目はもっとましになって、一週間目、平常心で幸せになって下さいねって言えます。十日続けたら、私も悪かったのかも知れないと思える。あそこでもう少し私は、こういうふうに出して、こういう言葉を言えば良かったのかも知れないって思えてくるのですよ。そうしたら、本当に、あなたごめんなさいね。幸せになって下さいね。と思えるのです。そのあたりから、子どもの心が溶け込んできだすのです。中身がワーと出だすのです。そして、まごころで幸せになって下さいねと愛を膨らんできだしたときに、子どもの心に流れて行って、今までの苦しみが流れてしまっただけで、本当の愛が流れてくると、そこから子どもがスーと立ち上がるんですよ。そして、学校へ行ったり、お仕事へ行ったりしだすんですよ。だからこれは、お母さんの心なのです。そして、再婚しましたら、前の夫に、ここでこういうふうには言えなかったとか、ここでこういうふうには考えればよかったとか、気付きますよね。それを今の旦那さんにするのは、その言葉がけ、その愛し方をするのは、子どもでしたら、他人やと思っただけで、その子と溶けこめないんですよ。でも、それ以上にお母さんが本当の素直な愛を醸し出し、本当の素直な感謝をお出しになりますと、素直な心が子どもの心に流れ出すから、気が付いたら、その子は「お父さん、お父さん」と受け入れる心になるのです。

実はおとしですけど、京都の事務所にある日女の方が訪ねて来て下さいました。先生、ありがとうございました。私にこんな幸せが来るとは思いませんでしたわ。先生の講演を聞かせて頂いて、私は離婚して、連れ子を連れて再婚しました。主人と子どもがうまくいなくて、母として暮らしにくいからです、また離婚しようかなと思っただけで、私のチラシを見て、何か助けがあるかも知れないと思っただけで、聞きに来たっただけで、「あ、そうか。その助けをずっとし続けました。そして主人と共に半年が過ぎました。

ある日息子が、学校でどのクラブに入ろうかなって、迷っているようだから、これがいいかなと野球部を指して言うたら、「いや、お父さんに聞く。」って言ったのです。その時に、お父さんに聞くって言ってびっくりです。「ぼくおとうちゃんの言うとおりにするわ。」って、言ったのが始まりでした。そして、「お父ちゃん」って言うたら、お父さんびっくりして嬉しそうに、「ほな、野球部に入ったら。」と言った。「あそうか、ぼく、お父さんの言った野球部に入ろうか。」と言ったら、「頑張るな。」といいはったのです。それから何かしても、「お父ちゃん、お父ちゃん、お父ちゃん。」って言うて、私の言うことは二なのです。そしたら主人が最近、「あいつな、大学へ行かさんなあかな。塾へ行くか。」って言ってくれたのです。こんな幸せが巡ってくるなんて思いませんでした。是非、先生に会ってお礼が言いたいと思って、きょう参りました。」って来て下さったのです。嬉しかったですね。ほんとに嬉しかったです。そして私もお礼を言いました。「よく一回の講演を聞いて、そこまでやり遂げて下さいましたね。あなたのその努力の結果ですね。私は体験をお伝えするだけで、それをして下さるあなたが素晴らしい。」って言わせて貰いました。だから話を聞いても、し続けないと何にもならないのです。同じ一時間の講演でも、それがどっか本当だなと思ったら、どこからでもいいからし続けて下さい。陰でもいいですから、主人に一回謝り続けてみて下さい。ご自分の心が変わります。知らぬ間に、主人の方を向いて「ハイ。」って言うてますからね。今まで抵抗があったのが消えて、この「ハイ。」って素直に言うのが、疑念がスーと退いて、子ども達にもスーと通るのです。子ども達が素直になるのです。

そしてあるとき、ものすごい人が講演にきてくれました。まっ茶な毛が倍ぐらいあって、講演が終わって待ってらっしゃってお話したのです。そしたら、その方がそれから一年半程して、再度来てくれはって「先生、ありがとう。」って言われるのです。「どうしたん。」と言ったら、「私の主人は、どこにおるか分からなかったんです。実は少し悪いことをしましてね。まあ、どっちの方角でもいいかと思ひまして、頭を下げていました。子ども達がちょっと道を外しまして、悪いことしました。ある日、警察から「お前の息子、ここに居るから。」と言って呼ばれて、息子を貰い受けにいったのです。ところが、そこに主人が居りました。」って言うのですね。だから警察の人は、「主人に会いに来たのかな。」と思っただけでした。ところが、警察に行ったのは息子を貰い受けに行ったのに、そこで名前を言うたら、そちらの警察に「お父ちゃんか。」って言われるのです。「お父ちゃん、ここに居るから会わせろ。」って言われたらしんですね。びっくりしたそ

の人は、普段から謝っている癖が付いていますから、警察の人が主人を連れてきた瞬間に、その奥さんは土下座したって言うのです。「あんた、ごめんなさい。」と言って、「あなたをこういう辛い目に遭わせて、警察に追われて、こんなふうになるということをさせたのは、私の愛の無さです。あの愛の無さで子どもがまた警察に捕まっているんです。」

って言うと、ご主人は「いやいや、ぼくも至らなかった。」と言って、そこで二人が本当に土下座して、泣いて謝り合いしたらしいのです。それを出てきた息子がジーと見ていました。お父さんは、まだいつかはそこにいなければならないのですが、それで子どもを連れて帰って、「お母ちゃん、きょうからぼく勉強するで。普通の人になるわ。」って言って、それから子どもも学校に行き出して、頑張ってくれるようになったのです。そして、ご主人様も警察の中で優等生になられて、警察の人にかわいがって頂いて、そのうち出所して、「おまえ、出所してから何するんや。」と言われて、「何もすることがないなら、家を直してくれ。」ってと言われて上手だったので、それから警察の人のお家を直させて頂いているんです。」って言われるのです。ご主人様は、頭をかきながら「これから頑張りますよ。」って言われました。今本当に幸せそうにしてらっしゃいます。だから、何歳からでも、どういう状態からでも、奥様の心が変わって下されば幸せになれるのです。

そして、いちばんびっくりしたのは、不登校で一年も学校をお別れしていた子が、有名な女子高へ合格したことです。おとしですが、一番前で座っているすばらしい女性がいるのです。彼女は体を全然動かないで、私の話をしっかりと聞いて下さるのです。なにかナヨっとして弱そうな、でもしっかりと聞いてくれている人がいらっしゃいましたので、「あんた、素敵ね。幸せになろうね。がんばろうね。」って言ったら、ニコッと笑っていました。二泊三日してお家へ帰って、「お母さん、私ね、あそこの高校へ行きます。」って言ったのが、東京のそこの地区の最高の公立高校よりももっとランクの上の私立の女子高だったらしいのです。それも有名な女子高で、中学2年生で不登校。そのとき、中学2年生なのです。それで、これはどうしようとお母さん思われて、それですぐ電話が掛かってきまして、「そんなのありますか。」「あります。本人の心次第。やるだけやって。」

と言うと、「分かりました。」と言って、「見てやりなさい。」と言うと、「分かりました。」と言って、小学生からの教材を家で一生懸命教えながら、学校では中学2年に復帰して勉強しながら、ずっと夏休みに追い上げてきたのです。その間、リコーダーも吹けるように、お母さんはリコーダーも教えて、ちゃんと吹けるようになった。そして、勉強も全部教えて、そして中学の教科に入ったのです。そして、中学2年の先生と、校長先生や

先生方にご挨拶したのです。そのときの挨拶が、「私は、小学6年間の教科はやりました。中学1年生の教科はまだ入っておりません。今、2年をしながら、1年を頑張りますので、諸先生方にこれから質問をいっぱいしますので、よろしくお願いします。」って頭を下げたのです。そして、1年の教科を仕上げて、そして2年の教科を仕上げて、そして3年のときは、もう学年で1番くらいの成績になったらしいのです。お母さんがすごい。その間、図書館へ行って調べて来たり、あっちへ行って調べて来たり、子どものために一生懸命に勉強したのですね。でも、6年間ぐらい学校を休んでいますから、そこの学校に入る何かの切符が欲しいと思ったのですね。そのときに、弁論大会というのが新聞に載ったらしいのです。そのときに、まずクラスの弁論で勝って、学年の弁論で勝って、学校全体で勝って、そして東京都のそこの地区で勝たなあかん。それは多分、超難関ということで、学級で勝って、学年で勝って、学校で勝って、地区で勝って、そしてその大きなところに出られて、優勝ぐらいの成績を修められたのです。それで、奥様が「これでその学校の切符を貰いました。」と言われたのです。そして、合格しました。私は、びっくりしました。そこまでの奇跡が起こるのです。お母さんの努力はすごい。そのお母さんに、「よく頑張られましたね。」って言ったら、「私はあの子が学校へ行かんようになるまで、そして行ってからも私の講演を聞くまで、ずっと手抜きでした。」と言われるのです。だから、「お母さん、行きたい。」と言った時に、「よっしゃ、胎教から今までの手抜きを全部あの子にいいように愛を注いでみよう。」だから、あっちに走り、こっちに走り、一生懸命に頑張ってきた。このお母さん、すごいですね。もちろん影で支えてくださるご主人さまの愛もすごいです。その結果、素晴らしくいい学校へ行かれて、今頑張っておられます。

そのたった一回の講演を聞いて頂いても、みなさん立派になって頂いております。本当にすごいですね。そのみなさまの胸の中に、少しでも役に立って頂ければ、皆様方の感謝の言葉も嬉しいと思っております。そして、日本の国が救われて、そして世界が救われて行くのではないかという気がしています。だから、どうぞ皆様方の愛の言葉を発信して頂ければ嬉しく思います。

それともうひとつ、その地区が良くなるという概念は、そこの地区に住んでいる私たちおとなの心次第ということ。私たちの夫に対する心掛けの話をずっとさせて頂きましたけれど、これは全てに応用できるのです。会社であれば、社長を一として、社長が喜んで頂けるように会社全体がうまく動くことにあるのです。

でも、その地区の子ども達で、本当に気の毒な子ども達もいっぱいいます。素直な子ども

も達もいっぱいいます。そのときに、本当に皆様方をお願いしたいのは、そういう悲しい姿をしている子ども達に、上から呪いのエネルギーだけは、流さないでいてほしいのです。その子ども達は、愛が欲しいのです。認めて欲しいだけなのです。だから、薦めて欲しいのは、「がんばれよ。」「いい子だね。」「幸せになるんだよ。」っていうふうな思いを流してあげてほしいのです。そうしたら、通りすがりの身も知らない人からの素晴らしいエネルギーを頂いて、心の中からやる気が出て、立ち上がることが出来るのです。だから、皆様方のそういう心が流れているというのが、その地区全体を活性化しますし、その地区から素晴らしい子ども達を世の中に送り出してやる事が出来るのです。

それがこの地です。あのすばらしい明治維新を見事に成し遂げた、こちらの皆様方の数々の思い、それがすごいエネルギーを流す素晴らしい人々の思いだったということです。だから、今しっかりとそういうエネルギーを発信して頂けたら、嬉しくございます。この地で生活できることを心の底からお喜びとして頂いているものと思います。

ひとつの家庭のはなしでしたけれど、それだけで閉じないでください。日本の人をつくり、世界の人をつくるもので、いまの世を変えて頂いたら、嬉しく思います。

本当に日本を救って頂いたらと思ってここに立っております。日本の将来をよろしくお願いいたします。本当にきょうはありがとうございます。



(質疑応答)

○ 先生は、本当に前向きな方と思います。家族がみんな前向きになれる方法がありましたら、アドバイスをお願いします。

⇒ お釈迦様は、女性は太陽だと言われています。きょうは言及できませんでしたが、心の作り方と言うのでしょうか。女性が中心、太陽で、男性が陰なのです。エネルギーというのは、陽から陰に流れるのですね。だから、女性は発信なのです。受けるのが子ども

と主人です。回りの方が受けるのです。だから、中心になる母、妻がどういう思いを持つかで、それを受けて人生を歩むというのが、子どもとご主人様とまわりの方々なのです。だから、まず妻なのです。そして、家の中の中心になる女性の皆様方が、まず感謝して、積極的にやる気を起こす。主人に愛のある言葉を言うし、子どものお世話をすることが嬉しい。ご飯の用意をするときでも、用意しながら嬉しいと思いながらご飯の用意をする。なんでも感謝して喜んでなさいますと、子ども達、そして旦那さん達もやる気が出るのです。いちばんいけないのは、こんな人と結婚するんじゃなかった。こんな夫なんてイヤ、家事ひとつ嫌と思いますと、みんなやる気がなくなります。ここが大事なのです。このことをお釈迦様は、「女は太陽である。」とおっしゃいました。私たち、太陽からエネルギーを頂いて生きているのです。家の中の女性の思いがエネルギーなのです。太陽のように燦々と降り注ぐような感謝・喜び、やる気のエネルギーをお出しになるとみんなうまくいきます。

○ 先生のご主人は素直に座って頂けたということですが、座ってほしいと言われて素直に座れないご主人も多いと思います。ご主人に頭を下げるタイミングをどのようにしたらよいか、実践編を教えてください。

⇒ 女性で、ご主人さまの前で素直に頭を下げられる人は、ほとんどいません。だから、「最初は、いらっしゃらない所で頭を下げましょう。」ってお願いしています。そして、頭を下げていますと、本当に詫びたくなるんです。お父さんのところへお茶を持って行かれて、「お父さん、どうぞ。」と言って、ぱっと横に座られて、「お父さん、今までごめんなさい。」って言っていますね。本当に真心で言われますと、お父さんも「イヤイヤ、僕の方も反省する。」って言うて下さるそうです。だから、こちらの真心次第で、相手の方が反応して下さいます。一回言うて、あのときの下げ方、おかしかったなと思われたとき、「二度も三度も座って貰うのは、失礼にあたるので、そのときは影で謝りましょうね。寝られたあと、足元で下げましょうね。」って言っています。わたしも、主人が寝静まってからあやまったことがあるのですが、旦那さん気付いて、座っていました。何で分かったのと聞くと、「何か知らないけれども気が付いたら君が謝っているのです、座っているんだ。」と言ってくれましたけど、それほどこちらのエネルギーがいくらお休みになっても、旦那さんの心をコントロールするのです。そういう知恵が湧いて参りますので、でも旦那さんも受けてあげて欲しいです。